

教育を取り巻く社会の情勢と本市教育の現状と課題について

令和2年7月
四日市市教育委員会

1. 初等中等教育の本質的な役割

- ・ 新しい時代に必要となる資質・能力を育むための学習機会を保障する役割に加え、社会の形成者としての全人的な発達・成長を保障する役割や、身体的、精神的な健康を保障する安全安心な居場所・セーフティーネットとしての役割を担う。
- ・ 初等中等教育は協働的な学び合いの中で行われる特質を持ち、Society5.0の時代こそ、教師による対面指導や児童生徒同士による学び合い、地域社会での多様な学習体験の重要性が一層高まっていく。
- ・ 非常時の対応として取り組まれている家庭や地域社会と連携した遠隔・オンライン教育等を積極的に取り入れていくことにより、多様な子供たちを誰一人取り残すことのないよう、個別最適化された学びと、社会とつながる協働的・探求的な学びを実現していく。

※中央教育審議会初等中等教育分科会 新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会（第10回R2.6.18）から

2. 教育を取り巻く新たな社会情勢の変化

○社会情勢の変化

- ・ 人口減少・高齢化の進展

四日市市の場合

【2015年】（実測）

【2045年】（予測）

15歳未満	15歳～64歳	65歳以上	⇒	15歳未満	15歳～64歳	65歳以上
(13.6%)	(62.0%)	(24.5%)		(10.6%)	(55.2%)	(34.2%)

- ・ グローバル化の一層の進展

日本語指導の必要な子どもたちが増加 2016年：287人 ⇒ 2019年：394人

- ・ 急速な技術革新による超スマート社会の到来
- ・ 人生100年時代の到来
- ・ 成年年齢の引き下げ

2022年4月から成年年齢が18歳に引き下げ

- ・ SDG'sの実現

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現

- ・ ダイバーシティ社会の実現

異なる個性や能力を持つ一人ひとりを尊重し、多様性を受け入れることで、誰もが自分らしく参画・活躍できる社会の実現

- ・ 家庭の社会的・経済的背景による格差及び地域間格差

学校を子どもの貧困対策のプラットフォームとして位置付け。2019年10月から幼児教育・保育の無償化。2020年4月から経済的理由で修学困難な学生対象に高等教育の無償化を実施。

○教育をめぐる状況変化

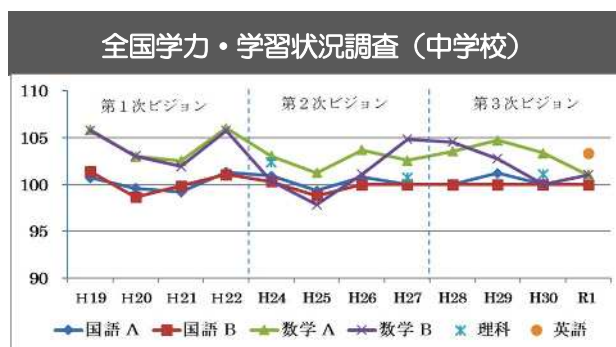
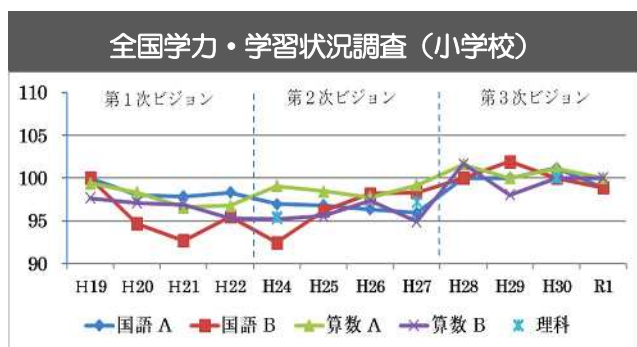
- ・第3次教育振興基本計画、新学習指導要領の円滑な実施
- ・子どもの学習・生活面の課題

幼児期の生活体験不足等、基本的な技能が十分に身につけていない。
 学習したことを活用し、課題解決に主体的に生かしていく面に課題がある。
 読解力の低下、将来の夢や目標を持っている子どもの割合が横ばいである。
 暴力行為の発生件数、不登校児童生徒は依然相当数に上る。
 いじめによる重大な被害が生じた事案も引き続き発生している。

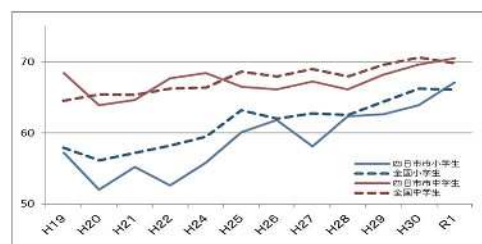
- ・運動する子どもとそうでない子どもの二極化
- ・地域・家庭の教育力の低下
- ・学校に求められる役割の増大による教師への負担増加
- ・コロナ禍における「学校の新しい生活様式」の導入

3. 本市の現状と課題

現在の本市の学力状況については、全国学力・学習状況調査の結果から、平成28年度以降、小学校では、ほぼすべての教科が全国平均と同等またはそれ以上となり、小学校の学力が改善されつつあります。中学校においては、平成19年度からほぼすべての教科において全国平均以上でした。また、令和元年度に初めて実施された英語についても、全国平均を2ポイント上回っており、本市の強みとなっています。本市では、小中学校の指導体制の一体化による授業改善を推進しており、義務教育修了時において、全国と同等あるいはそれ以上の学力を各教科とも身に付けているということが分かります。一方、小学校、中学校とも国語については全国平均と同程度の値が続いており、伸びていないことから、読解力・表現力の向上が課題であると捉えています。また、中学校の数学に関しても、近年やや低下傾向であり、算数・数学を中心とした論理的思考力の育成も今後の課題です。

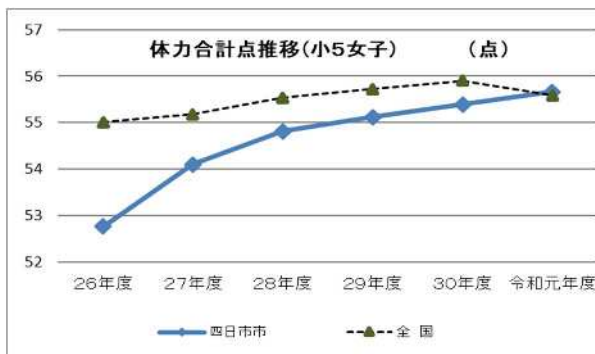


また、課題であった、家庭等での学習習慣の定着については、「普段、学校以外で1時間以上勉強をする子ども」の割合が、年々増加するとともに、令和元年度の調査では初めて小中学校とも全国平均値を上回りました。今後、オンラインでの家庭等での学習を進めていく中で、全ての子どもの学びを定着させていくため、家庭等での学習と授業とのつながりが重要となってくることから、家庭等での学習の習慣化を一層定着させていく必要があります。



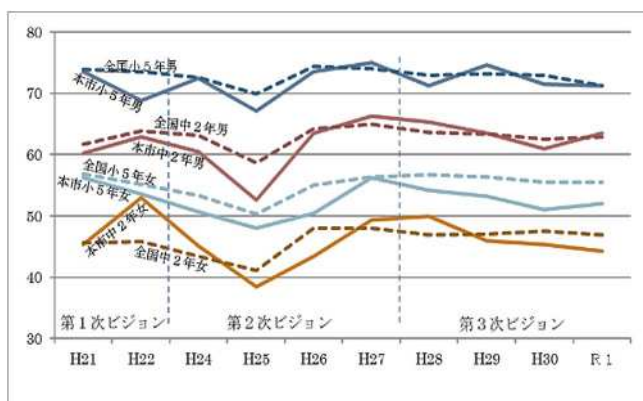
普段、1時間以上学校以外で学習する子どもの割合

また、体力面については、全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果から、小学校は男女とも平成26年度には全国平均値と比べ、2ポイント下回っていましたが、令和元年度は男女とも全国平均値を上回っています。中学校は男女とも、平成27年度からは毎年、全国を上回っていましたが、令和元年度は男女とも下がりました。特に男子は大きく下回りました。中学校においては部活動の活動時間が短くなりましたが、部活動の効果的な取り組みへの改善と、授業における運動量の確保や運動の質を高める取り組みを進め、日常的な運動習慣の定着に繋げていく必要があります。



令和元年度「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」結果から

一方、「運動やスポーツすることが好きですか」との問いに対する肯定的な回答の割合は、近年、全国平均を下回る状態が続いています。このことを改善するために、発達段階に応じて、子どもたちが「楽しい」「やってみよう」という思いを持ち、工夫しながら運動することの楽しさを味わうことができる機会を充実させる必要があります。



運動やスポーツすることが好き

4. 課題解決に向けた四日市市の取り組み施策

(1) 四日市市総合計画（2020～2029）に位置付けた施策

子どもたちの中で眠っている可能性は、これからの社会・四日市を創る希望そのものです。教育活動全体を通して、子ども自身が持つ「自ら成長する力」を存分に引き出すために、**基盤となる学力と体力、言語・情報活用・問題解決能力**等を向上させるとともに、夢と志を持った子ども一人ひとりの確かな成長を支援します。

ICTを基盤とした先端技術を学校教育現場へ効果的に導入することで「**誰一人取り残すことのない、公正に個別最適化された学び**」を提供し、全ての子どもに、社会に対応できる力を育成します。

いじめ、不登校、家庭環境等多様な問題へ対応できる体制づくりの推進と、特別な配慮や医療的なケアを必要とする子どもへの支援体制を充実させることで、**多様な子どもに対する多様な学び**の場を提供します。

インターネットを通じて発信される情報内容を主体的に読み解き、インターネットを安全に活用することができる子どもを育てるために、**メディア・リテラシー養成を通じた人権教育**を推進します。

(2) 四日市市新教育プログラムに位置付けた施策

新総合計画の開始に合わせ、これまでの学校教育活動の更なる推進と共に、新しい社会の到来などを見据え、よっかいちの子どもたちが、**問題解決能力、言語能力、情報活用能力**といった、これからの社会に対応するため、必要となる資質・能力を身につけることを目指す本市独自の「**四日市市新教育プログラム**」を策定しました。

Society5.0の社会への対応など、新たな教育課題への対応の為、優先的に取り組むべきテーマを、子どもの学びに応じて以下の6つの柱で提示しています。

- ・文章を正確に理解し、適切に表現する力を育成
- ・筋道立てて説明できる論理的思考力の育成
- ・発達段階に応じた英語コミュニケーション能力を育成
- ・運動機会の拡充により、生涯にわたり運動に親しむ能力を育成
- ・主体的な学習意欲と自立に向け自らキャリアを育成していこうとする能力の育成
- ・地域に愛着を持ち、持続可能な社会を創ろうとする子どもの育成

更に、この6つの柱を、就学前も対象とし、就学前・小学校・中学校の繋がりを意識した一貫性・連続性のある教育・指導を実現していきます。

5. 現教育大綱を振り返って

平成27年11月施行の四日市市教育大綱では、策定時の子どもたちの状況として、全国学力・学習状況調査から、基礎的・基本的な学力は身に付いているものの、知識を活用する力や、家庭学習での学習習慣の定着にやや課題があることなどの傾向が明らかになっていること、全国体力・運動能力、運動習慣等調査から、8割を超える子どもが「運動が好き」と答える一方で、小学生の体力は、全国平均を下回る傾向となっていることが示されています。

この状況を踏まえて、本市が目指す教育として、社会人になっても通用する問題解決能力を養成するとともに、豊かな人間性を身に付け、ふるさと四日市に愛着と誇りを持つ「心豊かな“よっかいち人”」を育むこととし、本市の教育を支える5つの理念を示しました。

(1) 社会人になっても通用する問題解決能力の養成

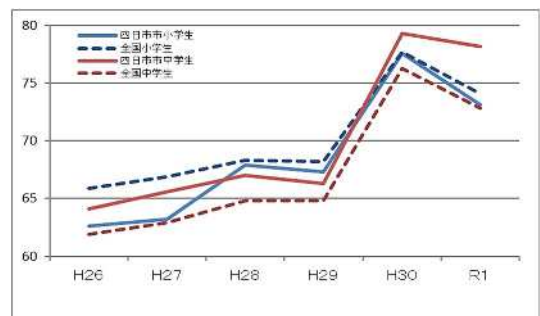
基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着を図るとともに、身に付けた知識・技能を基に情報を収集したり、他者と協働的に課題解決したりする授業を推進することで、子どもの問題解決能力の向上を図ってきました。

授業改善にあたっては、子どもの学力の実態把握と分析に基づく授業づくりを推進するとともに、三重大学教育学部とのプロジェクト会議を通し、専門家の知見を活用し作成したガイドブック（「問題解決能力向上のための5つのプロセス【四日市モデル】」）を活用して、多様な学び合いや言語活動（説明、討論、記録、要約など）の充実を図りました。

また、家庭と連携した家庭学習の定着によって学校での学習を補完し、確かな学力の定着を目指してきました。

取り組み指標	現状値 H27	H28	H29	H30	R1	R2	目標値
「四日市モデル」を指導案に位置付け、授業研究を行った学校数（校）	—	23	37	44	59		全小・中学校（59校）

言語活動の充実について、本市の子どもたちは、特に中学校で、学級の友達と話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりしていることが伺えます。子どもたちは、互いに学び合い、より良い人間関係を築くことが概ねできているものと考えますが、今後、ICT教育が進展する中であっても、話し言葉によって意思疎通を図ることの重要性が大きくなると思われることから、コミュニケーション能力育成の取り組みを継続していく必要があります。問題解決能力向上に向けて、「四日市モデル」の活用は、新学習指導要領におい

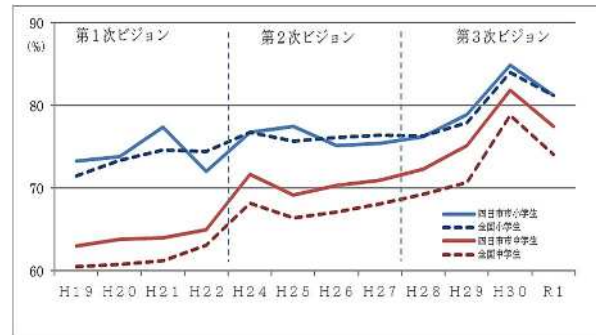


学級の友達と話し合う活動を通して自分の考えを深めたり、広げたりしている。

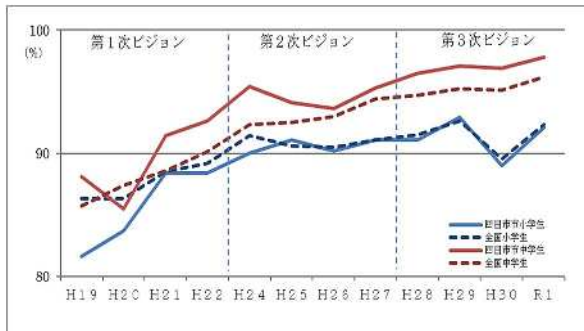
ても、その理念・考え方は有効であります。今後は、国家戦略として一人一台のコンピュータ端末が導入されることから、新教育プログラムの趣旨を踏まえた「問題解決能力向上のための授業づくり」とICTの効果的な活用についての研究（ICT活用実践推進校事業）を進める必要があります。

(2) 豊かな人間性と健やかな体の育成

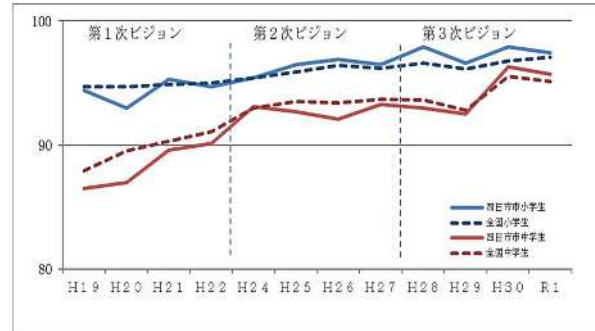
人権教育、道徳教育、生徒指導等様々な学習活動や生活体験を通して、自己有用感や他者と協調し思いやる心など、豊かな人間性の育成を図ってきました。全国学力・学習状況調査の児童生徒質問の結果から、「自分にはよいところがあるか」という問いに対する肯定的な回答の割合は、全国平均と比べてほぼ同程度か上回っており、本市の子どもたちの自己有用感が教育活動全体における人権学習等によって育まれているものと考えられます。また、規範意識や、いじめはどんな理由があってもいけないことだと思ふことに関して、肯定的な回答の割合は、全国平均値より高い傾向にあります。今後も、規則を守ることや、いじめを絶対に許さない態度や行動力を継続して育成するため、道徳科や特別活動等での主体的な学習を継続していきます。



自分にはよいところがある



学校の規則を守っている



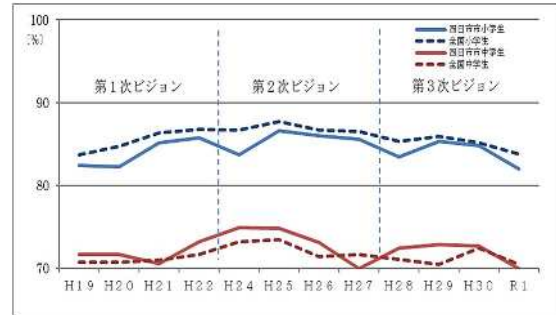
いじめはどんなことがあってもいけないことだと思ふ

さらに、健やかな体の育成に向け、子どもの発達段階や体力・運動能力の状況を踏まえた体育科・保健体育科の授業を改善することによって、子どもの十分な運動量を確保し、体力・運動能力の向上を図ってきました。具体的な取り組みとしては、「体力・運動能力推進指定校」（体育科の授業や授業外での体力向上につながる取り組みを行い、実践事例などの報告を行う学校）を年に3校ずつ指定し、その実践研究の成果を市内に広めてきました。また、全校において子どもたちの運動意欲の向上や課題となる体力要素の向上、主運動につながる運動という視点で、授業はじめの5分間に運動を行う「5分間運動」を実践してきました。

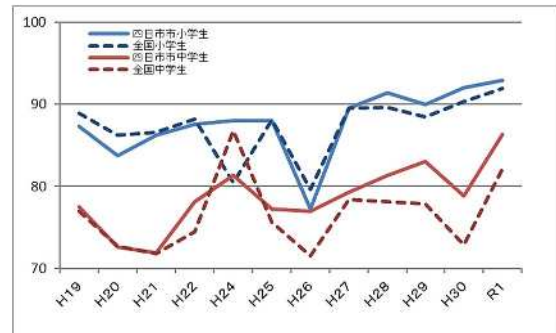
令和2年度から新教育プログラムの4つ目の柱として「運動大好き！走・跳・投UPプログラム」が位置づけられました。今後も、引き続き新体力テストの経年実施により、本市における体力・運動能力の実態把握に努めるとともに、子どもたちが楽しみながら運動能力向上に取り組むことができる体育科・保健体育科の授業改善を進めていく必要があります。特に、授業はじめの「5分間運動」の取り組みの充実を図るとともに、運動の日常化を図るための環境整備の充実を図ることが重要です。

(3) 夢や志の実現に向け、自ら学び続ける意欲・態度の涵養

夢や志の実現に向け、自ら学び続ける意欲・態度の涵養を掲げてきましたが、第1次ビジョン時の平成19年度から、小学生が夢や目標を持っている割合は全国平均値より低い状態が続いています。中学生に関しては、全国平均値と同程度ではあるものの、およそ7割に留まり、近年は低下傾向です。一方、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問の結果から、学習したことは将来役に立つと考える子どもは、小中学校とも全国平均値より高い値を示しています。今後は、今まで以上に、学ぶことと社会とのつながりを意識した学習や体験活動を通し、主体的・協働的に学ぶ意欲と態度を涵養するとともに、各校の活動と併せて「四日市版キャリア・パスポート」を活用し、子どもたちが自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったり、自己評価することで、主体的に学びに向かう力を育み、子ども自身の夢や志の実現につながるように、体系的・系統的な教育活動の展開を促進する必要があります。



将来の夢や目標を持っている



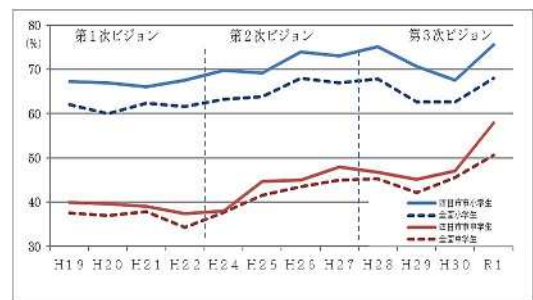
学習したことは将来役に立つと思う

(4) 家庭、地域、学校・行政が連携・協働した教育の実現

学校・家庭・地域がそれぞれの教育的な役割と責任を自覚し、家庭の教育力向上を支援するとともに、家庭や地域と連携・協働した教育活動に取り組むことにより、「地域とともにある学校」の実現を目指してきました。取り組みの一つとして、四日市版コミュニティスクールを核として、保護者・地域住民の学校運営への参画の意識の醸成に努め、協働して教育活動に取り組む仕組みを構築することにより、地域とともにある学校づくりを推進してきました。

取り組み指標	現状値 H27	H28	H29	H30	R1	R2	目標値
①四日市版コミュニティスクールの指定校数 (校)	20	27	34	41	49		55校

全国学力・学習状況調査の児童生徒質問「地域行事に参加している」の問いに対して肯定的な回答をした子どもの割合は、小学校、中学校とも平成19年度以降、全国値を上回っており、本市の子どもたちが地域の活動に積極的に関わろうとしていることが伺えます。令和3年度にはすべての学校が、コミュニティスクールの指定を受け、学校と家庭・地域とが連携して子どもを支える仕組みが定着します。これらをさらに発展させるとともに、将来の社会や地域を担う人材として、子どもが地域に愛着を持ち、社会とのつながりを意識するような取り組みの充実が求められます。



地域行事(※)に参加している

地域行事…地区防災訓練、環境保全活動、社会貢献活動など

(5) 都市の特長を生かした四日市ならではの教育の推進

四日市ならではの地域資源を教育に生かすことにより、ふるさと四日市に誇りと愛着を持ち、社会の一翼を担う人材を育成するための教育を推進してきました。

取り組み指標	基準値	H28	H29	H30	R1	R2	目標値
博物館・久留倍官衙遺跡及び地域の歴史・文化・自然等を学習教材として活用した学校数(校)	小38 中22	小38 中22	小38 中22	小38 中22	小37 中22		全小中学校 (59校)
企業やJAXAの出前授業を受けたことがある学校数(校)	小中 16	小中 24	小中 28	小中 36	小中 42		小中 50校

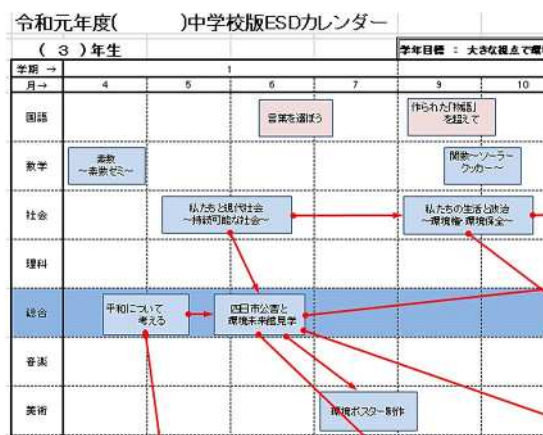
※統合により令和元年度から小学校数は全38校から37校になった。

具体的には、博物館、プラネタリウム、四日市公害と環境未来館、くるべ古代歴史館の活用や、自然教室を中心とした自然体験、萬古焼体験や茶摘み体験等の体験活動、さらには、四日市市の大きな特長である多様なものづくり産業や、四日市市が協定を締結しているJAXA(宇宙航空研究開発機構)と連携(四日市こども科学セミナーや連携授業等)した教育活動を図ってきました。

さらに、公害対策モデル都市として、地域住民・企業・行政が一体となり、産業の発展と環境保全を両立するまちづくりを進めてきた本市として、その環境改善の取り組みについて学ぶとともに、将来にわたり豊かな環境を持続する「持続可能な社会づくり」につながる環境教育を推進してきました。

具体的な取り組みとして、各教科や特別活動、総合的な学習の時間など、関連する学習内容を年間指導計画上に配列し、教科等横断的な学習の構造を明確にしたESDカレンダーを全小中学校で作成し、活用を進めています。また、ESD実践推進校を指定し、学習内容と実生活・実社会の問題をつなげて考える授業や、地域・家庭と連携した授業など、ESD推進を図る取り組みを進めています。

(ESD:将来にわたって持続可能な社会の創り手を育む教育【Education for Sustainable development】)



ESDカレンダー(例)

グローバル化が進む一方で、地域活性化の取り組みも進められているため、地域に対し、愛着や関心を持ち、地域の活性化に寄与しようとする意欲や態度を持った子どもの育成を図っていく必要があります。